散文の選後 水 野 仙 子

望を私に繰返へさせないやうに、 間の習慣ばかりではないだらうと思はれます。 0 たのが今まで、 うのでした。集つたうちの比較的 躇なく當選させられるやうなのがなくて、 思つて私は張り合ひついてそれ~~熱心に拜見 らのことでした。「粒が揃つて來たこと!」かう ばなりません。それは今度その散文を選んでか は今喜びの上に立つてゐることを申上げなけれ て折々に感じたことなどを考へてみますと、 さて私は粉の四ケ月の間に皆樣のお作を拜見し 束のしるしに指切りをしやうではありませんか その不思議な力を利用して、私も皆樣も、 持つた一つの力でせうか。 しく繰りかへされることは、 こに新しい年を迎へることになりました。「おめ て、妙な心細さを手許に殘つた數篇の上に して行きました。今までは兎に角是ならばと躊 でたう!」といふ言葉が、 ■一月~~と皆樣に親しんで來て、 人特つた或物を活すべく務めるやうに、 **〈〜と目を通した方〜數がうつつて行くに從つ** 五篇ありました。 今度は是はと思つて選り分けた 次から又再びもとの失 あながちそれは長い なんの躊躇もなく新 新年といふものい 皆樣どうぞ奮 い」のを選つ とう/\こ 味は お約 一篇 おの 私

ます。それは皆樣ばかりでなく、 あつたら、 るとか、或は不公平だとか思召すやうなことが 其趣味に傾き易いもの、若し皆樣が、 平に取扱つてゐる積りですが、それでも猶人は とを申上げてみようと思ひます。 にして、 てゐるのですが、それはまたの機會を俟つこと いて注意した方が最も親切な批評だと私は思つ の作に就てよりも、 爲めになることだと思ひます。 つてしまひます。私としては成るべくそれを公 それが同じ程度に價値のある場合などは全く迷 それぐ~の持つた特色に等級をつけることで、 りますから。 り切らなかつたものょうちにも隨分いょのがあ だけの身贔屓が出るものと見えます。 も多く載せたいものと、 が心血をおそいぎになつたものだから、 を私はいつも遺憾に思つて居ります。 ために他の欄よりも掲載される數が 例の通り秀逸の諸篇に感じたまいのこ 御遠慮なく仰言つて頂きたいと思ひ それから選をするに就ての苦心は その人々の傾向や特色に就 散文の擔當者は擔當者 又批評は、 私に取つても 偏つてゐ それに載 少ないの 折角皆樣 一つで 一 つ す。 け置いてあとを直して置きまし 行に、 ないやうに思ひまして、 癖がありますが、口語體にはあまりふさはしく す。この人にはくをうとする(黒う弱、 なく言つてよくその時刻の感じを現はしてゐま

感じと状態とを書かれたものだと思ひます。 五二水野内新妻みほ子) ■天賞==冬から春へ(岡 巧 みにも冬から春 Ш 市四中山下 丁目 へ の そ

つて下さい。それから散文はどれも行數が多い そのシーンに適當した言葉遣ひが驅け出しの筆 手法はなかく、侮られません。 冬から春までを寫し迎へました。 の巧みも才に流れず、落着いたもの言ひをして が先刻よりづゝと闇が深んだ。」などゝなんでも でないことを證明して居ます。「一 ありましたので、 にちよいくく全體の感じを壞すやうなところが の丸い背中にさす日などの、 縁に解きものをしながら孫の守をしてゐる老婆 山路子)これはまた一層上手に書い ■地賞==煙草と男と夕闇と 氣をつけて置きました。 インプレシーブな (豐前國中 たゞ語尾 紀尾井寺の廣 寸の間である てあります 津 町 森

れど、その筆にチヤームを持つてないのが損 千世子)この人はいつも達者にお書きに ■人賞==施療院 ました。 鬼に角此作は纏つて居ます。 操を捕 へたことが全體 (本郷區東片町 九角野: それは最後 の 纏 りをつけ 方孫 なるけ 田

差支への

な

など」)

圖書室の午後 (小石川 山本輝子) 感覺に筆

でした。惡い作ではありません。たところのあるのを追ひ越すことは出來ませんその効果だけで前の施療院の、どつかつかまへ進めて行つたのが相當に成功してゐます。然し

その眞實が尊すぎる。■晩秋の一日(肥前すぎな)これといつて感心

てはも少し餘外見をしてもいいと思ひます。即し過ぎた爲めだらうと思ひます。場合に依つところがないでせうか。あんまり自分の感じにを驅使してゐる代りに、少し獨り合點のやうな■靄深き朝(府下石塚石原美代子)自由に辭句

■湯から上つて(丹波さみどり女)女の持ちさのやうなものにしなければ効果が薄いだらうがありますが然しもつとピリツとした胡椒の辛がありますが然しもつとピリツとした胡椒の辛はから上つて(丹波さみどり女)女の持ちさ

■破れし曉夢(常陸桂の華)かういふものはも■破れし曉夢(常陸桂の華)からいふ意味ではつと韻文的にした方がよかつたかも知れませんのと韻文的にした方がよかつたかも知れませんのにではないし曉夢(常陸桂の華)か

初出・底本:「處女」大正三年一月

公開:令和六年三月二十五日

水野仙子ホームページ